

氏 名 陳 可冉

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1473 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 林家の漢詩文と近世前期の俳諧

論文審査委員 主 査 准教授 陳 捷
教授 山下 則子
教授 鈴木 淳
教授 揖斐 高 成蹊大学
教授 深沢 眞二 和光大学

本研究は、江戸初期儒学の総帥であった林羅山と、その一派である林家の学問と文学を中心に、近世前期の俳文学における日本漢詩文の受容の様相を明らかにすることを目的とする。

漢文学の受容が蕉風俳諧の樹立に多大な影響を与えたことは、すでに周知の常識であり、この方面での先行研究の蓄積は文字通り汗牛充棟の観を呈している。しかし芭蕉の漢文学の教養をめぐり、彼が読んだとされる書物として、従来の研究がしばしば検討の対象としたのは、漢籍の和刻本や幼学書、そして詩法入門書の類であり、坊間に流布していた当代の儒者、詩人らによる漢詩文の著作や編書への関心は不十分であった。

近世初頭の日本漢詩文も、芭蕉を含む俳諧師らの教養の源泉の一つとして位置付けられなければならない。特に近世文芸の発達に大きな影響力を及ぼした林家の学問と文学が、芭蕉の俳諧創作にも様々な刺激を与えたことを、本研究の考察によって明らかにする。本研究は、先学諸氏の学恩を受けつつ、独自の視点を近世前期の漢文学と俳文学の研究に導入し、実証による地道な出典研究を前進させようとするものである。本論では四章に分けて論証を展開している。

第一章「林門の詩文創作」は、研究がまだ手薄な林家の文章や聯句および門人の伝記をめぐって検討を試みるものである。第一節「林羅山の文章作法——『古文真宝後集』との関わりに触れて」では、従来の羅山の漢詩に対する評価を踏まえ、新たに漢文の角度から羅山文学の特質を概観し、彼と深い関係をもつ『古文真宝後集』所収の諸作との比較によって、羅山における文章の作法を具体的に分析する。第二節「林家の聯句趣味」では、初期林家三代の聯句愛好を取り上げる。特に林氏父子・兄弟を囲む林門の文学サロンに注目し、そこに遊戯的漢詩文の一面が見られるという先行研究の指摘を踏まえながら、実際に「竹洞聯句」を読み、聯句という文芸を論じる彼らの主張を検証し、林家における聯句創作の意義を考える。第三節「異彩の伶人——狛高庸年譜稿」では、林門の文事や大名らとの雅交を中心に、鷲峰の愛弟子である狛高庸の生涯を年次順に辿る。

第二章「近世前期俳諧師への林家の影響」は、上方の惟中と江戸の芭蕉を取り上げ、近世前期の俳諧師と林家の関係を考察するものである。第一節「岡西惟中と林家の学問」では、俳論、紀行文、古典注釈など多岐にわたる惟中の著述を俎上にのせ、「假儒」と自称する彼の文業と林家との関わりを究明する。さらに林家の学問、或いは林家経由の中国詩学の知識は、惟中の俳諧にいかなる刺激を与えたかを考察する。第二節「惟中の随筆と林家の著述」では、惟中と林家の関係を論じた第一節の続きとして、特に彼の学殖と技量が存分に披瀝された『続無名抄』と『一時随筆』の二点に焦点を絞り、惟中が林家の著述をどれほど、そしてどのように利用したのかを精査する。第三節「芭蕉と羅山の紀行文——造語『好風』を手がかりに」では、『おくのほそ道』・「松島」の書き出しに出てくる、旧来の説では芭蕉の造語とされる「好風」という言葉をめぐり、羅山の『丙辰紀行』の中に、芭蕉の典拠と思われる「好風美景」という表現を見出し、それを手がかりとして、芭蕉と羅山の紀行文との関わりを明らかにする。

第三章「芭蕉における『本朝一人一首』の受容」は、『本朝一人一首』の影響を念頭に置いて、芭蕉の日記、紀行文、発句を再考するものである。第一節「『本朝一人一首』考」

では、芭蕉における同書の受容を検討する前に、まず『嵯峨日記』の注や解題では曖昧にされてきた、『本朝一人一首』をめぐるいくつかの基本的な問題点を検証する。さらに所収詩作の成立年代の下限や『本朝一人一首』の諸本についての考証を行う。第二節「黒川家と林家の交渉——『本朝一人一首』の刊行をめぐる」では、第一節で報告した、黒川玄通の跋をもつ『本朝一人一首』の初印本に基き、跋文の作者である玄通に焦点をあて、黒川家と林家の関係から、『本朝一人一首』の写本から板本に至るまでの背景を探ってみる。第三節「『本朝一人一首』による芭蕉の解読——『嵯峨日記』・『おくのほそ道』を中心に」では、まず『嵯峨日記』四月二十八日の条に焦点をあて、野村家蔵本を参照しつつ、四月二十五日の条の末尾との比較によって、『嵯峨日記』には本文と自注という二種類の異質な文章が併存していると論じる。さらに芭蕉がそれらを意識的に書き分けているのは『本朝一人一首』の影響ではないかと推論する。次に、執筆時期が『嵯峨日記』に近い『おくのほそ道』を取り上げ、句評の形式で曾良を紹介した「黒髪山」の分析を通して、鷲峰の詩評の特徴に合致する芭蕉の書き方を解明する。さらに『おくのほそ道』「立石寺」・「尿前の関」における語句の出典として、『本朝一人一首』巻六「遍照寺翫月」と巻三「在唐観昶法和尚小山」を指摘する。

終章「結論にかえて」は、一つの問題提起で本論文を総括するものである。「芭蕉俳諧と日本漢詩の一接点——「馬に寝て」句を読み直す」では、従来の出典研究の方法にとらわれず、より広い視点から「月遠し茶の煙」全体を一つの括りとして、特に「茶煙」と「月」の取り合せに着目し、丈山の「山中早行」や、林鷲峰編『本朝一人一首』所収の諸作との比較を通して、『野ざらし紀行』・「小夜中山」における芭蕉の発句は、複数の日本漢詩と密接な関係をもつ可能性が高い、という見解を論じる。最後の附録「荷溪詩抄」は、狛高庸の詩作を、諸家の詩文集から抄出し、彼の文業と伝記の研究に資することを目的とする。

本論文における、林羅山・鷺峯ら、近世前期の林家の人々とその門人たちとの学問的・文学的営為が、近世前期俳諧にどのような影響を与えたかというテーマは従来の俳諧研究において手薄であったところである。今回提出された「林家の漢詩文と近世前期の俳諧」は、既存の研究の基本的な誤りを修正し、林羅山らの詩文によって芭蕉などの俳諧の表現の典拠を新たに提示している点で、非常に意義のある論文となっている。近世前期俳諧、とくに芭蕉における漢文学受容について、従来の和刻本漢籍や幼学書ではなく、当時の日本漢詩文に注目した点は優れた視点といえる。また、従来必ずしも正当に評価されてきたとはいえない林羅山・鷺峯・鳳岡の漢文学を、主として林家の漢文学の有する特色と芭蕉作品への影響という視点から具体的・実証的に分析しようとした問題意識も高く評価することができる。

第一章においては林羅山の漢文と『古文真宝後集』に収められた作品に対する模倣や林家の漢詩聯句創作の様相を分析し、林羅山の漢文の特徴や林家の聯句創作の多様性を明らかにした。第二章では岡西惟中と林家の学問との関係や、芭蕉における林羅山の紀行文の影響に焦点を当て、近世前期の俳諧師に対する林家の学問と文学作品との多大な影響を浮き彫りにしている。第三章は芭蕉の『本朝一人一首』の受容についてのいくつかの具体的問題を取り上げ、芭蕉の漢詩文の教養に関しては、中国文学の直接の影響のほか、『本朝一人一首』のような日本漢詩文の影響が重要であることを明らかにした。基本的な資料や先行研究への目配りは行き届いており、それぞれの論証においても着実な検証や新見が満ちている。新たな資料の発掘分析に取り込んでいる点も評価できる。地味な作業の積み重ねによって、伝記研究の進んでいなかった林家二代鷺峯の門人狛高庸の年譜を作成し、その詩作を輯録したことも研究上大きな意義を有している。

ただし、第一章第一節において述べられている林羅山の『古文真宝後集』の文章に対する模倣と彼の漢文の独創性との関係や、第二章に名前が挙げられている山口素堂などの林家と芭蕉を繋ぐ部分の論が不足していること、『本朝一人一首』の検証における黒川玄通の跋文の削除に関する仮説の正当性を主張する十分な論証が展開されていないことなどの問題点を挙げるができる。とくに個別具体的な事例に止まり、「林家の漢詩文」と「近世前期の俳諧」との関係を総体的に捉えるには至らなかったことが惜まれる。

以上のような若干の不十分さは感じられるものの、論文全体としては高いレベルの達成を示しており、合格とする。今後は林家の漢詩文を研究していくとともに、彼らの作品および注釈書類が近世文学全般に与えた影響についてのさらなる成果を期待する。